

# 『源氏流極秘奥儀抄』注釈(三) 18松風く玉鬘22

岩 坪 健

本稿は『源氏流極秘奥儀抄』の松風(『源氏物語』第一八帖)から玉鬘(第二二帖)までを掲載する。各帖の担当者(出口京香、胡鴻洋、武蔵隼斗)は、すべて本学博士課程在学者である。凡例などは前稿と同じであるので省略する。

十八 松風

松風の巻は、あかしにて御心ざし浅からず入道のむすめをおぼしめして、たゝならざりしを御覧しすて、都へのぼり給ひしを、御姫君うみ奉りて、とかく月日過て三に成給ふ。あまり、さかひへだゝりて恋しければ、都近き大井といふ所住せ給ふに、川浪凄く松の嵐に物さひしく思ひて、源氏のかたみに残し置給ひし琴を弾し給ひたる巻也。身をかへてひとりかゑれる古里に聞しに似たる松風ぞ吹

松風

御伝曰、明石のことくあしらへ、前後長たん軽くすへし。又、かけのすゝきとて、切留のすゝき、遣ひやう功者有

『源氏流極秘奥儀抄』注釈 (三) 18 松風く玉鬘 22

へし。<sup>9</sup> 尤<sup>モツ</sup>らに遣<sup>ツ</sup>ひてよし。若<sup>ワカ</sup>松<sup>ツマツ</sup>を生<sup>イク</sup>、前<sup>マエ</sup>に杜<sup>カキツ</sup>若<sup>ハタ</sup>か桔<sup>キ</sup>梗<sup>ハヤウ</sup>か女<sup>オミナ</sup>郎<sup>ヘシ</sup>花<sup>ハナ</sup>など生<sup>イク</sup>へし。此<sup>12</sup>もよう大事<sup>タイシ</sup>也。

愚<sup>ク</sup>按<sup>アン</sup>曰<sup>イハク</sup>、尾<sup>13</sup>花<sup>ハナ</sup>に外<sup>ホカ</sup>花<sup>ハナ</sup>をあしらふ。「三<sup>14</sup>年<sup>サンネン</sup>かほと袖<sup>ソデ</sup>の上<sup>ウヘ</sup>の玉<sup>タマ</sup>のやうにもてなし、かしつき、なじみ奉<sup>タテマツ</sup>る」とあり。<sup>15</sup>「尾<sup>15</sup>花<sup>ハナ</sup>か袖<sup>ソデ</sup>」といふを用<sup>モナフ</sup>る也。<sup>16</sup>松<sup>マツ</sup>親<sup>ニヨレリ</sup>より。<sup>17</sup>白<sup>クハ</sup>花<sup>ハナ</sup>あそひ給<sup>アソビ</sup>ふとあり。なれば

十八 松風 六条の御息所。松、杜若、桔梗、女郎花。

【訳】松風の巻は、明石で（光源氏が）愛情深く入道の娘をお思ひになつて、（光源氏の子を）身<sup>ミ</sup>ごもつていたのを見捨てられて、（光源氏だけ）都に上られたが、（明石の君が）姫君をお産みして、あれやこれやと月日が過ぎて（姫君は）三歳になられる。あまりに遠く隔たつていて恋しいので、（光源氏は明石の君を）都に近い大堰<sup>おおい</sup>という所に住ませなされると、（明石の君は大堰川の）川波の音が身にしみて、松を吹く嵐にもの寂しく思つて、光源氏が形見に残して置かれた琴をお弾きになつた巻である。

尼姿に身を変えて、（夫の入道を明石に残して）一人で帰つて来た故郷で、（あの明石の地で）聞いた風に似た松風が吹いていることよ。

師伝によると、明石の巻の活け方のように取り合わせ、前後長短は軽くするのがよい。また、掛けの薄といつて、切り留めの薄の使い方は巧みさがある。とりわけ裏に使うのがよい。若松を活け、前に杜若か桔梗か女郎花などを活けるのがよい。この形が大切である。

愚案によると、尾花に他の花を取り合わせる。「二、三年の間、（明石入道は孫の姫君を）袖の上の玉のように世話をし、大切に育て、懐いてさしあげる」と（物語に）ある。「尾花が袖」というのを用いるのである。松は親に由来する。白花は、「月が趣深い所なので合奏される」と（物語に）ある（ことによる）。

【注】 1 「此巻、まつかせといふ事。けんしの、あかしにて御心さし浅からず、入道のむすめをおほしめして、た、ならさりしを御覽しすて、のほり給ひしを、御ひめきみうみたてまつりて、とかく月日すきて、三になり給ふ」(『小鏡』)。「松風の巻は、明石にてあひなれ給ひし女、ひめ君をもふけ、三年へたゝりて」(『龍野』)。光源氏は明石の地で結ばれた明石の君を残して、朝廷の許しにより帰京した。その後、明石の君は明石で姫君を出産した。松風の巻ではそれから二年が経ち、姫君は数えで三歳になった。

2 「あまりにさかひへたゝりたれば、おほつかなく恋しくおほして」(『小鏡』)。光源氏は明石の君と三年離れていた間、恋しく思い絶えず手紙を送る。

3 「京ちかき大井といふ所に住給ふ」(『龍野』)。「源氏物語」では光源氏は改築した二条の東院に、明石の君を迎えようとする。明石の君は姫君の将来を案じて上京を決意するが、光源氏の恋人たちが住む二条の東院に入ることをためらい、母方の曾祖父が大堰川<sup>おおいがわ</sup>のあたりに持っていた屋敷に移り住む。

4 「川なみすこく、松風ふきはらひて、ふるさととしもおほえず、さひしければ」(『小鏡』)。「川なみすこく、松のあらしに、ものさひしくおもひて」(『龍野』)。「松の嵐」は松の梢に吹く強風。明石の君と母君は、大堰川の波音に明石の海を思い出し、松風の音を聞いて物思いにふける。

5 「あかしをけんし、出給ひしおり、都よりもたせ給ひしことを、あふまてのかたみとて、をき給ふを取いたして、ひき給ふ」(『小鏡』)。「源氏の形に残し給ひし琴をた<sup>(彈)</sup>んしたまひたる」(『龍野』)。松風の音は琴の音に例えられ、「松」に「待つ」を掛けて、人を待つ寂寥感や寂しさを歌う。例、「夏の夜、深養父が琴ひくをききて みじか夜のふけゆくままに高砂の峰の松風吹くかとぞ聞く」(後撰和歌集・夏・一六七・兼輔)。

6 卷名歌。明石の君が琴を鳴らすと、松風が響き合い、母の尼君が明石の浦で聞いた松風を思い出して詠んだ歌。「ふるさと」は尼君の祖父が所有していた大堰の屋敷。

7 13 明石の巻の注8では前は海辺、後ろは人里とする。

8 「此薄の遣方、かけの薄とて、

習也」(『龍野』)。『いけばな総合大事典』(主婦の友社、一九八〇年)によると薄は陽の草であるので、「かけのすき」は陰の薄ではなく、掛けの薄か。「留」は15蓬生の巻の注12参照。「切留」とは草木を傾けて活けるため、花瓶の口と内壁とで支える方法をいう。内側の壁に沿うように草木の根元を斜めに切り、先の方は花瓶口にもたれさせて固定する。 9 「薄は後口に遣ひ」(『龍野』)。13明石の巻の注6でも、松の裏側に季節の花か糸薄をあしらう。後ろ根締めと言ひ、挿した花や枝の根元を締めて形を整えるため、後ろに草花を挿し添える。 10 「此かた、曲ヒ松なり」(『龍野』)。「曲ヒ松」は「磯馴松」(13明石の巻の注5)と同じか。一方「若松」は多くの年を経ない松で、数え三歳の明石の姫君に例える。 11 「杜若は前に遣ふへし」「前の留は、女郎花か桔梗にても仕上ルなり」(『龍野』)。これらの花は明石の君になぞらえる。「女郎花」はその当て字の通り、女性に例える。夏から秋にかけて、枝の先端部に黄色の小さな花が多数、密に集まって咲く。「桔梗」は陰花で女性を表わし、八、九月ごろ青紫色の花を咲かせる。桔梗も女郎花も秋の七草の一つ。「杜若」はその五文字を句の頭に詠みこんだ和歌、「唐衣きつつなれにし妻しあればはるばる来ぬる旅をしぞ思ふ」(古今和歌集・羈旅・四一〇・業平)により、遠く離れている「妻」を連想させる。杜若は明石の君のほか、紫の上にもなぞらえた(13明石の巻の注10)。 12 「もやうものなり。大事」(『龍野』)。「模様」は形、趣の意。17総合の巻の注10参照。 13 「尾花」は薄の別名。穂の形が動物の尾に似ていることから、この名がついた。 14 「二三年かほと、袖の上の玉のやうに、もてなしかしつき、なじみたてまつる」(『小鏡』)。『源氏物語』では、「(姫君は)夜光りけむ玉の心地して、(祖父の入道は)袖より外には放ちきこえざりつる」(四〇三頁)とある。 15 風になびく尾花が、人が袖を振っている様子に似ていることから、尾花は袖に例えられる。例、「心をば尾花が袖にとゞめおきて駒にまかする野辺のゆふぐれ」(建礼門院右京大夫集・二二二)。この「尾花が袖」は、明石

入道の「袖の上」(注14)に見立てる。 16 注10の「若松」は明石の姫君を指すので、この「松」は親になった明石

の君を表すか。 17 「月おもしろきあたりなればあそひ給ふ」(『小鏡』)。「月おもしろきあたり」は、光源氏が宴を

開いた桂の地で、平安京の西側にあり、明石の君が住む大堰に近い。桂の地は月の名所で、月には桂の木が生えてい

ると考えられていた。「白妙しろたへの白き月をも紅の色をもなどかあかしと言ふらん」(拾遺和歌集・雑下・五一八・藤原

伊衡これひら)のように月の色は白とされ、白い花に例えた。また白は五行思想では秋と西に当てるので、この場面の季節と

場所に合う。

(出口京香)

## 十九 薄雲

薄雲ウスクモの女院ニヨインと申マツは藤壺フチツホの御事也。源氏ゲンシのけいばなれば、しのびて参り給ふる人也。此宮ミヤ源氏ゲンシわりなくも契チキリ、若宮出来

させ給ひて、御位ミタビにつき給ふまで、父御門チ、ミカトの御子ミコとのみ、人さへやおもらん。(ママ)か、やく日の宮ミヤ、三十七にて、とく

もかくれ給ふ。頃トキは三月ヤヨヒの事也。天下テノ諒闇カリアウ、御門ミカトを始ハジメ、御歎オノナケキのいろふかし。まして源氏ゲンシの御心オノココロのうち、おもひやる

へし。

9 入日ミネさす峰ミネにたなひく薄雲ウスクモは物思モノシふ袖ソデにいろやまがへる

## 薄雲

10 御伝ミツタテニ曰シセツク、此形コノカタ、時節シセツの花木ハナよし。秋芒アキバか冬尾花フユオハナか、又大葉オホハものか、かたの如く生る也。花イクを入日イリヒと見、す、き

をたなひく雲クモと心得コハコへし。頃トキは春也。

14 愚按アヘンニ曰イハクク、藤フチをいくるもよし。か、やく日の宮ミヤにたとふ。又曰マタク、天下テノ諒闇カリアンの時トキなれば、花形ハナカタさひしくいくる事習ナラフヒ

也。<sup>17</sup>又、桜をいくる。<sup>サクラ</sup>

深草<sup>フカ</sup>の野へのさくらし心あらはことし計はすみそめにさけ

と、ひとり花にかこち給ふ所あり。<sup>クハシチウ ケイフツ</sup>卷中の景物かくの如し。

十九 薄雲 なつの御かた。時節ノ花 秋芒、冬尾花、大葉もの、藤。

【訳】薄雲の女院と申すのは藤壺の事である。光源氏の継母なので、（光源氏が）忍んで参りなさる人である。この（藤壺の）宮に光源氏が無理に関係を結んで、若宮がお生まれになって、（冷泉帝として）即位されるまで、桐壺院の皇子とばかり、世人も思っているだろうか。輝く日の宮と呼ばれた藤壺は三十七歳で、早くもお亡くなりになる。頃は三月の事である。世を挙げて喪に服し、冷泉帝をはじめ悲嘆のご様子は深い。ましてや光源氏の御心の中は、想像してほしい。

夕日が射している峰にたなびいている薄雲は、悲嘆にくれている私の喪服の袖と色が似ているだろうか。

師伝によると、この形は季節の花木がよい。秋薄か冬尾花か、または大葉ものかを型通りに活けるのである。花を入日と見て、薄をたなびく雲と理解しなさい。頃は春である。

愚案によると、藤を活けるのもよい。輝く日の宮（と讃えられた藤壺）に例える。また（愚案に）よると、世をあげて服喪する時なので、花の形は寂しく活けることが習わしである。また、桜を活ける。

（亡骸をおさめた）深草の野の桜に心があるならば、せめて今年だけは（喪服と同じ）墨色に咲いてほしい。と、（光源氏が）一人で花に嘆かれるところがある。この巻の中の風物は、この通りである。

十九 薄雲 夏の御方。時節の花 秋薄、冬尾花、大葉もの、藤。

【注】 1 「此うす雲の女院と申は、藤つほの事」(『小鏡』)。「薄雲の女院と申は、藤つほの御事にて候」(『龍野』)。藤壺は桐壺帝の後、紫の上の叔母。 2 「か、やく日の宮と申は、けんしのけいぼ、しのひて参りたまふる人なり」(『小鏡』)。光源氏が幼い時に亡くなった母(桐壺の更衣)と藤壺は他人の空似であったので、光源氏は義母にあたる藤壺を密かに慕った。 3 「此宮へ、源氏、わりなくものひて、若宮、出来させ給ひ候」(『龍野』)。若宮は冷泉帝を指す。 5 若紫の巻で、藤壺が病気で実家に下がった時、光源氏が人目を忍んで会い、懐妊した。 4 「十一才にて御位につき給ふまで、父御門の御子とのみ、人さへやおもひまいらせ候」(『龍野』)。冷泉帝の実父は光源氏であるが、世間では桐壺帝の子とされ、冷泉帝も即位して藤壺が亡くなるまでは実情を知らなかった。 5 「御とし三十七にて、かくれ給ふ」(『小鏡』)。当時、三十七歳は厄年。光源氏は「光る君」、藤壺は「輝く日の宮」と並び称された(1 桐壺の巻、四四頁)。 6 「ころは三月の事なり」(『小鏡』)。藤壺が亡くなった旧暦三月は桜が咲く頃。 7 「天下諒闇なり。御門をはしめたてまつりて、御歎のいろ、ふかし」(『小鏡』)。慈悲深い藤壺の死を世人は惜しみ、殿上人などは皆、黒い喪服を着た。 8 「とりわけ、けんしの御心のうち、おもひやるへし」(『小鏡』)。光源氏は自邸の敷地に設けた念誦堂に一人で引きこもり、一日中泣き暮らした。 9 卷名歌。薄くたなびいている雲が喪服と同じ薄墨色であるのを見て、光源氏が詠んだ和歌。 10 「此かた、身木、時節の陽花」(『龍野』)。「陽花」(陰花)は11花散里の巻の注11を参照。 11 「冬す、きか大葉ものか、かたのことく生る也」(『龍野』)。「芒」は秋の七草の一つで、秋になると茎頭に大きい黄褐色の花穂をつけ、小穂(尾花と呼ぶ)に絹糸状の白毛がある。「尾花」の名は、花の形が獣の尾に似ていることによる。「大葉」の葉は大楕円形で、裏面に灰白色の細毛が密生する。 12 「陽花は入日、すゝきは、たなひく雲と見るへし」(『龍野』)。「たなひく雲」は注9の和歌による。 13 注6参照。 14 藤を活ける

17 「ふかくさの野へのさくらし心あらはことしのはる

はすみそめにさけ」など、花にひとりかこち給ひて、なかめたまふ」〔小鏡〕。光源氏は自邸の庭の桜を見て、この和歌（古今和歌集・哀傷・八三二・上野岑雄）を口ずさんだ。

朝貌 アサカホ

朝<sup>1</sup>貌<sup>カホ</sup>の齋<sup>サイ</sup>院<sup>イン</sup>は、式<sup>シ</sup>部<sup>キョウ</sup>卿<sup>キョウ</sup>の宮<sup>ミヤ</sup>の姫<sup>ヒメ</sup>宮<sup>ミヤ</sup>、加<sup>カ</sup>茂<sup>モ</sup>の齋<sup>サイ</sup>にておはし、か、お<sup>2</sup>りゐさせ給<sup>キタマフ</sup>ひて有<sup>アリ</sup>けるに、源<sup>ゲン</sup>氏<sup>シ</sup>御<sup>ミ</sup>心<sup>シン</sup>をよせ給<sup>キタマフ</sup>ひける<sup>3</sup>とも、折<sup>セ</sup>ふし<sup>4</sup>の御<sup>ミ</sup>情<sup>セイ</sup>しき御<sup>ミ</sup>返<sup>ヘン</sup>事<sup>ジ</sup>なとも、に<sup>5</sup>くからず聞<sup>キコ</sup>えさせ給<sup>キタマフ</sup>へとも、つ<sup>6</sup>るに御<sup>ミ</sup>こ、ろつ<sup>7</sup>よくて、やみ給<sup>キタマフ</sup>ふ。お<sup>7</sup>りな<sup>7</sup>りては、御<sup>ミ</sup>おは<sup>7</sup>の桃<sup>モモ</sup>園<sup>エン</sup>の宮<sup>ミヤ</sup>に一所<sup>ヒトコロ</sup>にすみ給<sup>キタマフ</sup>ふ也<sup>ナリ</sup>。

見 8  
1

僅

コデシ  
 イチク  
 御伝曰、花形、  
 9  
 ミキ、朝貌也。木草にまかはぬやうに活へし。  
 10  
 14  
 ヌヘ  
 故に朝かほを、  
 5  
 ミキとすと心得へし。  
 6  
 シキ  
 キヤク  
 ミヤ  
 ヒメ  
 キミ  
 式部卿の宮の姫君、  
 11  
 カモのいつきの役にて、  
 ヤク  
 12  
 キ  
 ハサ  
 ツキ  
 ミ  
 ハン  
 ケ  
 又、木の花にても、荅半開

愚<sup>クア</sup>按<sup>ン</sup>に曰<sup>イハク</sup>、

て活イクへし。

色に染ぬといふことなり。桃を活躍。桃園といふによれり。黄白の花、御くしおろしの御衣のいろに  
いくる也。たとふ。



二十アサガハ 槿 明石のきみ。牽牛花、木槿、木綿、桔梗、藤ばかり、桃。

【訳】 朝顔の斎院は、式部卿宮の姫君であり、賀茂神社の斎院でいらつしやつたが、（斎院を）退かれていた時に、光源氏が御心を寄せられたけれども、その折々の御情愛の深い御返事なども、好意をもつて申し上げなさるが、最後まで（光源氏の求愛を拒む）ご決心は強くて、途中で終わられる。（斎院を）退位してからは、叔母君のいる桃園邸と一緒に住みになるのである。

かつて見たときのことか少しも忘れられない朝顔の花の盛りのような、あなたの盛りの美しさは、過ぎてしまつたでしょうか。

師伝によると、花の形で中心となるのは、朝顔である。（ほかの）木や草に交じり合わないように活けるのがよい。交じり合うような趣があれば、悪い活け方である。また、木の花でも、荅が半開までのものを用いるのがよい。これは朝顔の斎院といって、式部卿宮の姫君が賀茂神社の斎院の役職を退かれることである。そのために朝顔を中心とする、と心得なさい。

愚案によると、朝顔という名（の花）は多くある。木槿や木綿や桔梗、また、牽牛花や藤袴、これも朝顔の名がある。どれも、同じように活けなさい。また、「決心が強いため」とある。よつて、白い花を活けるのもよい。どの巻においても、よそよそしい趣には白い花を活けるのである。色に染まらない、ということである。桃を活ける。桃園（の宮）というのによる。黄色と白色の花は、出家して着る法衣の色に例える。

【注】 1 「あさかほのさいあん」とて、式部卿の宮の姫君、かものいつきにておはし、か（『小鏡』）。「朝良の斎院は、式部卿の宮の姫君にておはしまし候」（『龍野』）。「かものいつき」も「斎院」も、加茂御祖神社（下鴨神社）と加茂別雷神社かもわけいかずじんじや

（上賀茂神社）に奉仕した未婚の皇女を指す。 2 「おりゐさせ給ひて」（『小鏡』）。「折居（下り居）の頃」（『龍野』）。朝顔の斎院は父親（桃園式部卿宮）の死去により、斎院の地位を退いた。 3 「御心にかけて、申かよはせ給へとも」（『小鏡』）。「君、御心をよせられし御歌、送りまいらせられけるに」（『龍野』）。光源氏は若い頃から朝顔の姫君に思いを寄せていたが、斎院は神に仕える身であるので結婚できなかった。斎院を退いてからは彼女の叔母のお見舞いにかこつけて、何度も桃園邸を訪れていた。 4 「折ふしの御情しき御返事なとも」（『小鏡』）。「あるかなきかにうつるあさかほ」との御返事（『龍野』）。光源氏が注8の和歌を贈ると、朝顔の姫君は、「秋はてて霧の籬（まがき）に結ばほれあるかなきかにうつる朝顔」と返した。光源氏の歌の「露」「盛りは過ぎ」を「霧」「移る」とずらし、おとしやる通り盛りを過ぎてひそやかに生きておりますと答えた。 5 「にくからす聞えさせ給へとも」（『小鏡』）。朝顔の姫君は光源氏に好意を抱いていたが、光源氏と関係を結んだ六条御息所が9葵の巻における車争いの場面で、葵の上一行の乱暴な振る舞いにより自身の乗る牛車を壊され大恥をかいだことを知っており、その二の舞を演じるのを避けて、光源氏の求婚を拒んだ。 6 「つゐに御心つよくて、やみ給ふ」（『小鏡』）。「心つよき御方かとい、しものかたりにて候」（『龍野』）。朝顔の姫君が光源氏の求愛を拒む気持ちは強く、二人が結ばれることはなかったが、その後も手紙のやり取りは続いた。 7 「おりゐになりては、御おはのも、その、宮に、一ところにすみ給ふなり」（『小鏡』）。斎院の地位を退いて後は、叔母である女五の宮のいる桃園邸に身を移した。 8 卷名歌。注4参照。「朝顔」は花の名に、朝顔の素顔を掛ける。「露」は「朝顔」の縁語で、「つゆ」（少しも、という意味の副詞）を掛ける。光源氏が、恋い慕う朝顔の姫君に贈った和歌で、自分の好意に応えてくれない相手に対して、ご自身だって盛りを過ぎているのではないかと、戯れたか。 9 「此かた、身木、朝良なり」（『龍野』）。朝顔は、アジア原産のヒルガオ科の一年草。日本には

奈良時代に中国から渡来し、薬用として栽培されていた。10 「本草へまつわぬやうに生へし。」(『龍野』)。朝顔の

茎はつる性で左巻きに巻き付く。「纏ふ」は巻き付く、「紛ふ」は交じり合って見分けがつかなくなる、という意味で異なる。物語には、「枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれに這ひまつはれて、あるかなきかに咲きて」(四七五頁)とある。

11 「まつう心ありて、あしく候」(『龍野』)。朝顔の姫君がどの男性とも関係を持たず、独身を貫いたことを表わすか。12 「又、木花にても、つほみ半開までを用ゆべし」(『龍野』)。半開までの蕾を用いるのは、未婚の象徴か。13 注12を参照。14 朝顔の姫君にちなみ、朝顔をこの活け花の中心とする。15 朝顔は秋の七草の一つだが、その実態は時代により異なり諸説ある。江戸時代中期より観賞用に品種改良が盛んに行なわれた結果、現代の朝顔とは異なる。

16 「木朝顔」は朝鮮朝顔の異名で、夏から秋にかけ、朝顔に似た白い花が咲く。「木槿」は「むくげ」とも言い、夏から秋にかけ五弁花が咲く。花は朝開いて夜しほみ、淡紅・白・淡紫色などがある。「綿」の花は白、黄また紫色の五弁花。「桔梗」は夏から秋にかけて、茎頂近くに鐘状で先の五裂した花を開く。17 「牽牛花」は朝顔の別称。大事な牛を牽いて行き、薬草の朝顔に替えたという故事による。宋の高丞撰『事物紀原』には、「牽牛、本草補注曰、始出田野人牽牛易薬、故以名之」とある。

18 「藤袴」は秋の七草の一つ。淡紅紫色の小

花が茎の頂きに群がる。19 注16 17 18の花々のうち藤袴のみ五弁花ではないが、どの花も同じように活ける。20 注

6 参照。『小鏡』に、「(朝顔の姫君の)御心つよきゆへに、あやにくにや、けんしの事の外に、おりたち申給ひしかとも、御こころつよくて、のちに、つゐに、御くしおろし給ふ」とある。21 朝顔以外に白い花を活けるのもよい。

22 色に染まらないとは、他人や物事に影響されないことをいう。ここでは朝顔の姫君が、光源氏の求婚を拒否したことを表わす。23 朝顔の巻の舞台が桃園の宮であることによる。注7 参照。24 「御髪おろし」は貴人が髪を剃り落

として仏門に入ること、その「御衣」は法衣を指す。朝顔の姫君は独身を貫き、後に出家した。

(武蔵隼斗)

廿一 少女

加茂の臨時祭といふことを、大内にてつとめさせ給ふ。時分は毎年十一月嘉例也。二十よりうちの女房をそろへて、天人のすがたにいだしたて、舞姫とて参らせらる。御めのと、是みつの娘の舞面白く舞ことを、けんじ、いにしへのことなとおもひいだし、いまだ忘がたくおぼしめす人あり。「それも今は年ふりぬらん。我も年ふりぬ」とおぼして、

を<sup>7</sup>とめ子が神さびぬらし天津袖ふるき世のともよはひへぬれは

少女

御伝曰、此形、大葉に小菊の艶なるものよし。大葉は少女の舞の袖、やさしき花は舞とみるへし。花形は令人の花形に<sup>10</sup>同し。頃は十一月也と心得べし。

愚按に、むかしをおもひ出られたる情あれば、梅よし。梅にむかしを忍ぶ事、伊勢物かたりに<sup>13</sup>も有。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして 業平

又、神祇の花也。神楽とて奏人あり。竹を<sup>16</sup>活るに飛雁といふ葉を、はさみ入るべし。是は雲井の雁といふ故事也。又、六条京極あたりに四町をしめて殿つくりして、此殿にこゝろくの、このみ庭を作りし也とあり。春草木春明

といふ春の。卯花、藤、つゝし夏の御方。木高き紅葉秋の御方。五葉の松冬の御方。外に紅葉を<sup>24</sup>活て其葉を箱のふたに入、床に置事、習あり。是は紅葉箱とて御使ありし故事也。

25  
こゝろから春まつ園は我やとの紅葉を風のつけてたにみよ

といふ歌によれり。以上、少女、巻中の景物也。

二十一 乙女（祭祀） こきみ。葉、小菊。春ノ草木、卯ノ花、藤、つゝし、紅葉、五葉松。

【訳】 賀茂神社の臨時祭ということ、宮中で行わせなさる。時期は毎年十一月の吉例である。二十歳より下の女性をそろえて、天女の姿に仕立て上げて、舞姫として奉仕させなさる。（光源氏の）乳母子である惟光の娘が舞をすばらしく舞うことを（見て）、光源氏は昔のことなどを思い出し、今なお忘れにくくお思いになる女性がいる。「その人も今は年老いたであろう。私も年を取ってしまった」とお思いになつて、

昔の舞姫も、今は年を取ってしまっただろう。天の羽衣の袖を振つて舞う舞姫の旧友である私も、年を取つてしまったのだから。

師伝によると、この形は大葉に小菊のつややかなもの（を活けるの）がよい。大葉は乙女の舞の袖として、優美な小菊は舞（姫）として見るのがよい。花の形式は、雅楽を演奏する官吏の形式と同じである。頃は十一月であると心得るのがよい。

愚案によると、昔を思い出される恋心があるので、梅を活けるのがよい。梅に昔を忍ぶ事は、伊勢物語にもある。

月は（昔の月では）ないのだろうか、春は昔の春ではないのだろうか。私の身一つだけが元のままなのに（すべては移ろい去ってしまったようだ）。業平（の和歌）

また、天神地祇の花である。神楽といつて、舞楽を奉納する人がいる。竹を活けるにあたり、飛雁という葉を挟み入れるのがよい。これは雲居の雁という故事による。また、六条京極あたりに四町を占めて邸宅を造つて、この邸

宅に思い思いに、（女君たちの）好みの庭を造ったとある。春の草木は、春は曙という、春の御殿。卯の花、藤、つつじは夏の御殿。梢の高い紅葉は秋の御殿。五葉松は冬の御殿。そのほかに紅葉を活けて、その葉を箱の蓋に入れて、床の間に置くことが決まりである。これは紅葉箱といって（梅壺中宮から紫の上に）御使者があった故事による。

心から春を待つていらっしやるあなたの庭では（秋は退屈でしょうから）、私の庭の美しい紅葉を風に付けてでもご覧になってください。

という和歌による。以上、少女の巻中の景物である。

【注】 1 「賀茂の臨時のまつりといふ事を、大内にてつとめさせ給ふ」（『小鏡』）。賀茂神社の臨時祭は陰暦十一月、下の酉の日に行われた。ただし『源氏物語』で光源氏が五節の舞姫を奉ったのは、十一月の丑の日の新嘗祭である。<sup>にいなるさい</sup>

2 「時分は十一月なり」（『小鏡』）。「毎年の御嘉例とて、十一月」（『龍野』）。「嘉例」は良い先例、吉例の意。

3 「二十よりうちの女房をそろへて、天人のすかたにいたしたてて、舞姫とて大内殿へ下<sup>（天下サ）</sup>一人なとのかたより参らせらる」（『小鏡』）。大嘗祭<sup>だいじようさい</sup>や新嘗祭<sup>にいなるさい</sup>における豊明<sup>とよあかり</sup>節会<sup>のせちえ</sup>では、公卿や殿上人、受領の家々から五節の舞姫を出して競い合う。舞姫を出す家を選ぶことは大変な名誉であった。『源氏物語』では光源氏のほか、按察大納言、左衛門督、源良清が自分の娘を舞姫として美しく仕立てる。天武天皇が吉野宮で琴を弾いたとき、天女が降臨して袖を五度翻して舞ったことに由来して五節の舞と言われる。

4 「御めのとのこれみつかむすめを出し立て参らせ給ふに」（『小鏡』）。「これみつの娘の舞、おもしろく舞事をかんし給ひ」（『龍野』）。光源氏は惟光の娘を舞姫として、自邸より奉仕させる。『小鏡』には「御めのとのこれみつ」とあるが、惟光の実母が光源氏を育てた乳母であるので、正しくは

「乳母子」である。

5 「むかし、けんしの若くおはせしおり、参りしをとめをしのひおほしめして、いまた忘れかたくおほしめす人あり。それをおほしめして」（『小鏡』）。「いにしへの事とおもひいたし」（『龍野』）。舞姫を目にした光源氏は、昔の舞姫で今も心にかけている筑紫の五節を思い出し和歌を詠む。

6 「それいまは年ふりぬらん。我も年ふりぬ」とおほしめして」（『小鏡』）。時に光源氏、三十三歳。筑紫の五節との出会いは、八年以上前になる。

7 卷名歌。「をとめ子」は五節の舞姫で、筑紫の五節を指す。「神さびぬ」は年月を重ねて神々しく見えること。「袖」は五度袖を振る舞姫の袖を指し、「ふる」は「降る」と「古」の掛詞。

8 「此形、大葉に小さく」（『龍野』）。「大葉」は大きな葉、またはシソ科シソ属の葉で、ここでどちらを指すかは不明。「菊」は秋の景物であるが、

残菊は初冬のものとしても歌われる。また、中国の菊花の故事を背景にして、不老長寿の花として和歌では詠まれる。例、「露ながら折りてかざさむ菊の花老いせぬ秋の久しかるべく」（古今和歌集・秋下・二七〇・紀友則）

9 「大葉は乙女の舞の袖、やさしき花は舞姫と見る。」（『龍野』）。大葉は舞姫の袖、小さな菊花は袖を振る舞姫にたとえる。本文では「舞」と表記されるが、「舞姫」の誤りと考えられる。五節の舞姫の起源は天女であるので（注3参

照）、不老長寿の象徴である菊の花（注8参照）になぞらえる。

10 「生様、れいじんの花形と申し」（『龍野』）。「令人」は伶人、雅楽を奏する官吏。舞姫も伶人も帝に舞や雅楽を奉る者として、同じ活け花の形式をとる。

11 注2参照。

12 梅は、「人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける」（古今和歌集・春上・四二・紀貫之）のように、香りを通して昔の人や物を思い起こさせる花として和歌に詠まれる。光源氏が舞姫を見て筑紫の五節を懐かしんだことから、昔を思い出す花として梅を活ける。

13 『伊勢物語』は平安時代の歌物語で、作者不明。在原業平の和歌を多く収録していることから、主人公のモデルは在原業平とされる。『伊勢物語』第四段では、姿を消した女が住

んでいた屋敷に翌年の一月、男は行き、梅の香りに昔を思い出して泣き、注14の和歌を詠む。

14 当歌は、『古今和

歌集』(恋五・七四七・在原業平)にも収録。業平は女の旧居に月が沈むまでいて、この歌を詠んだ。

15 「東風吹

かば匂ひおこせよ梅の花<sup>あめじ</sup>主なしとて春を忘るな」(拾遺集・雑春・一〇〇六・菅原道真)は、道真が大宰府に左遷さ

せられ離京する時、自邸の梅を見て詠んだ歌。その梅は、主人を追って大宰府まで飛んで行ったという、飛梅伝説として知られる。道真は死後、天満宮に祭られたので、梅は天神地祇の花として位置付けられる。

16 「神楽」は神前

に奏される歌舞のこと。賀茂臨時祭(注1参照)でも披露される。

17 「雲井のかり」(『小鏡』寄合語)。「飛雁」と

は魚尾葉(竹の葉が魚の尾のように二枚あるもの)の二枚の葉の間にある、芽吹き葉をいう(26 常夏巻の巻、注17 参照)。21 少女の巻において、幼馴染の雲居雁(内大臣の娘)と引き離された夕霧(光源氏の子息)が、こっそり雲居

雁の部屋の前に行くと、風に吹かれた竹がそよめき、雁の鳴きわたる声が聞こえた。雲居雁は夕霧を待つ自分を雁になぞらえて、「雲居の雁もわがごとや」と口ずさむ。この故事から、飛雁の葉を雲居雁になぞらえる。

18 「六条京

極あたりに四町をしめて、殿つくりして」(『小鏡』)。「六条京極」は平安京の地名で、東京極大路と六条大路の交差

する地点。「町」は面積の単位で、一町は一二〇メートル四方。光源氏は六条院という大邸宅を造営して、女君たちを住まわせた。

19 「此とのに心々のこのみ庭をつくりしなり」(『小鏡』)。光源氏は四つの屋敷と庭を造り、それぞ

れ四季になぞらえた。

20 「春のあけほのをしめ給ふ。春のくさ木とも、数をつくして植らるゝ」(『小鏡』)。光源氏

は春を好んだ紫の上を南東の屋敷(春の御殿)に住まわせ、庭にはあらゆる春の草木を植え込んだ。28 野分の巻では、夕霧が六条院を訪れて垣間見た紫の上の美しさを、「春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す」(二六五頁)と称した。ちなみに清少納言も『枕草子』で、「春は曙。やうやう白くなりゆく山際少し明り



て、紫だちたる雲の細くたなびきたる」と称賛した。 21 「夏の御かたにて、うの花、さうひ(蕭散)、くたに、ふち(藤)、つ、

しなと植たまひたり」(『小鏡』)。「卯の花」は、「卯の花の散らまく惜しみほととぎす野に出で山に入り来鳴き響こよもす」(万葉集・卷一〇・一九五七・作者未詳)のように、古くから夏の景物として詠まれる。「藤」は淡紫色の花が長く垂れ下がり、春の終わってから夏の初めにかけて咲く。「つつじ」は晩春から初夏にかけて花が咲く。北東の屋敷(夏の御殿)には11花散里の巻で五月雨の頃に光源氏が訪れて、「橘の香をなつかしみほととぎす花散里を尋ねてぞ問ふ」と詠み、夏の花とゆかりのある花散里(夕霧の養母)が住む。 22 「木たかき紅葉の色をましへ」(『小鏡』)。

「木高し」は木の梢が高いの意で、「引きて植ゑし人はむべこそ老いにけれ松の木高くなりけるかな」(後撰集・雑一・一一〇七・大河内躬恒)のように、権勢の永続を祝う意で用いられる形容詞。「紅葉」は木や草の葉が秋に赤や黄色に色づいたもの。南西の屋敷(秋の御殿)に住む梅壺中宮(秋を好んだことから秋好中宮とも呼ばれる)は光源氏の養女で、当巻で中宮に立后した。木高き紅葉は、立后して権力を光源氏にもたらしめた梅壺中宮にたとえる。 23

「五葉の松」(『小鏡』)。「五葉松」はマツ科マツ属の樹木。「淡雪も松の上にし降りぬれば久しく消えぬものにぞありける」(後拾遺集・冬・四〇三・藤原国行)のように、雪と松の取り合わせは和歌にも詠まれた。『源氏物語』でも雪景色を美しく見せるものとして、北西の屋敷(冬の御殿)の庭にも松が植えられ、明石の君が住む。ただし物語では「五葉」は春の御殿に植えられ、冬の御殿は「松の木」である。 24 「紅葉を箱のふたに入て、うへわらはのいともてつけ、きょうなるを御つかひにて」(『小鏡』)。梅壺中宮は箱の蓋に色とりどりの秋の花や紅葉を混ぜ合わせて入れ、注25の和歌を添え、少女を使者に仕立てて紫の上の元へ届けさせた。「紅葉箱」は梅壺女御の贈り物を表わす。

25 梅壺中宮が紅葉に添えて紫の上に贈った和歌。「春待つ園」は紫の上にいる春の邸。『小鏡』では結句が「つてにだ

に見よ」で、「つて」は便りという意味。その場合、下の句の訳は「紅葉を風の便りにでもご覧になってください」となる。春の御殿にいる紫の上には、自分のいる秋の庭のような美しい紅葉は見られないでしょうから、という自負が込められている。

(出口京香)

廿二 玉鬘

玉<sup>タマ</sup>かつらの事<sup>コト</sup>は夕顔<sup>ユウガン</sup>の上<sup>ウヘ</sup>の娘<sup>ムスメ</sup>にて、つくしかたにありしに、おとなしくなりて、京<sup>キョウ</sup>江<sup>エ</sup>のほり給ひしか、初瀬<sup>ハツセ</sup>まふて右近<sup>ウコン</sup>といひし人にめくりあひて、光<sup>ヒト</sup>る君<sup>キミ</sup>を親<sup>オヤ</sup>とたのみて、鬚黒<sup>ヒゲクロ</sup>大臣<sup>オト</sup>の北<sup>キタ</sup>のかたに成給ひし事<sup>コト</sup>をかきつらねたる巻<sup>マキ</sup>なり。

むらさきの上<sup>ウヘ</sup>、いかなるすちの御程<sup>オシホト</sup>にかと、うたかひて、よみ給ひし也。

恋<sup>コヒ</sup>わたる身<sup>ミ</sup>はそれなれと玉<sup>タマ</sup>かつらいかなるすちを尋<sup>タツネ</sup>きつらん

玉鬘

御伝<sup>ミデン</sup>曰<sup>イハク</sup>、此形<sup>コノカタ</sup>、木草<sup>キクサ</sup>の花形<sup>クハキヤウ</sup>、時節<sup>シセツ</sup>の珍花<sup>オシノクハ</sup>たるへし。み木<sup>ミキ</sup>の上<sup>ウヘ</sup>江<sup>エ</sup>覆<sup>オホ</sup>ひか、らして活<sup>イダ</sup>る。歌<sup>ウタ</sup>によりて習<sup>ナラ</sup>とす。物体<sup>モノカタイ</sup>、活花<sup>イケハナ</sup>

に、み木<sup>ミキ</sup>をおほはせて活<sup>イダ</sup>るは、此心<sup>コノココロ</sup>也。

愚按<sup>ウヘン</sup>ニ曰<sup>イハク</sup>、撫子<sup>ナデコ</sup>を活<sup>イダ</sup>る習<sup>ナラ</sup>あり。玉<sup>タマ</sup>かつらといふ事<sup>コト</sup>、箒木<sup>ハキキ</sup>の巻<sup>マキ</sup>に物語<sup>モノカタリ</sup>せし、撫子<sup>ナデコ</sup>のこと也。舟<sup>フネ</sup>にて活<sup>イダ</sup>るもよし。早<sup>ハヤ</sup>

船<sup>フネ</sup>にてのぼせ奉<sup>ホウ</sup>る也とあり。又<sup>マタ</sup>、梅<sup>ウメ</sup>をいくるも習<sup>ナラ</sup>あり。初瀬<sup>ハツセ</sup>に参<sup>マミ</sup>り給<sup>タマ</sup>ふと云<sup>イハ</sup>ふによせあり。貫之<sup>ツラユキ</sup>の歌<sup>ウタ</sup>に、「人<sup>ヒト</sup>はいざ心<sup>ココロ</sup>もしらず」といへるも、則<sup>スナハチ</sup>初瀬<sup>ハツセ</sup>にての事<sup>コト</sup>也。又<sup>マタ</sup>、杉<sup>スギ</sup>二本<sup>ニホン</sup>いくるもよし。杉<sup>スギ</sup>をいくる事は、

ふたもとの杉<sup>スギ</sup>のたちとを尋<sup>タツネ</sup>ずはふる河<sup>カハ</sup>のべに君<sup>キミ</sup>をみましや

といふ歌<sup>ウタ</sup>によせあり。以上、玉<sup>タマ</sup>かつら巻中<sup>マキナカ</sup>の景物<sup>ケイブツ</sup>也。

二十二 玉葛 右近。時節ノ珍花、撫子、杉。

【訳】玉鬘の事は夕顔の君の娘であり、筑紫の方にいた間に大人になって都へ上られたが、初瀬に参詣して右近と呼ばれた人と再会して、光源氏を親と頼んで、髭黒大臣の正妻になられたことを書き連ねた巻である。紫の上は（玉鬘が）どういう家柄のご身分であるのかと疑って、詠みなさったのである。

（亡き夕顔を）慕い続けた私は昔のままだが、玉鬘はどういう筋をたどって（私を）尋ねてきたのだろう。

師伝によると、この形式で本草の花の姿は、季節の珍しい花がよい。（この形の）中心部の上に覆い被せて活ける。（前掲の）和歌によって、（この活け方を）決まりとする。総じて、活け花で中心部を覆って活けるのは、この趣である。

愚案によると、撫子を生ける決まりがある。玉鬘という事は、帚木の巻で（玉鬘の父である頭中将が光源氏に）話した撫子の事である。舟の花器で活けるのもよい。「早船で（玉鬘を）上京させてさしあげる」と（物語に）ある。また、梅を活けるのも決まりである。初瀬に参詣なされるということに由来がある。紀貫之の和歌に、「人はさあ、心（が変わったかどうか）も分かりません」と詠んだのも、すなわち初瀬での事である。また、杉を二本活けるのもよい。杉を活けることは（右近が玉鬘に詠んだ）、

二本の杉が立っているこの初瀬にお参りしなければ、古川のほとりで姫君（玉鬘）に会えたでしょうか。という和歌に縁がある。以上は玉鬘の巻の風物である。

【注】 1 「玉かつらの事は、夕顔の上の娘にて、つくしかたにありしに、おとなしくなりて」（『龍野』）。筑紫は、筑前・筑後を含む北九州地方を指す。玉鬘は四歳の時、乳母の夫が大宰府の次官になり、一緒に筑紫に連れて行かれ、

二十歳ぐらいまで(『小鏡』では二十三歳まで)留まった。 2 「京へのほり給ひ、はつ瀬もふてに、右近といゝし人にめぐりあひて」(『龍野』)。玉鬘の美しさを聞いて、肥後国(熊本県)の豪族である大夫<sup>たいふのけん</sup>監が強引に求婚したため、乳母は玉鬘を伴ない上京した。長谷寺に参詣する途中、玉鬘との再会を祈っている右近と遭遇した。右近は夕顔に仕えていたが、夕顔の死後は女房として光源氏に引き取られていた。初瀬は現在の奈良県桜井市初瀬町の一带をいう。古くは武烈天皇や雄略天皇の宮殿の所在地とされ、平安時代には長谷寺があることで有名。 3 「ひかる君を親とたのみ、ひけくろの北のかたに成給ひし事を、かきつらねたるまきにておはしまし候」(『龍野』)。帰京した右近から玉鬘との再会を告げられた光源氏は、玉鬘を引き取る。玉鬘が髭黒と結婚したのは31真木柱の巻だが、『小鏡』も22玉鬘の巻に、「かくてのほり、はせにて右近参りあひ、けんしのおと、に申て、むかへ侍りて、ひけくろの大将の北の方になり」とある。 4 「むらさきの上、「いかなるすちの御程にか」とうたかひて、よみ給ひしなり」(『小鏡』)。この文脈では紫の上が注5の和歌を詠んだことになるが、『源氏物語』では光源氏の詠作。 5 卷名歌。「いくとて尋ね来つらむ玉かづら我は昔の我ならなくに」(後撰和歌集・雑四・一二五三・源善朝臣)という歌による。 「玉鬘」は多くの玉を緒に通した髪飾り。 6 「此かた、木草花とも、時節の珍花を生る也」(『龍野』。「珍花」は、長谷寺で右近が偶然見つけた玉鬘にたとえるか。 7 「それゆへ、身木<sup>身木の上へカ</sup>上へお、ひか、らして生る」(『龍野』)。光源氏が玉鬘を養女として庇護したことを表わすか。 8 注5の和歌を指す。 9 「そふたひ、生花に身木をお、わけて生るは、此心なり」(『龍野』)。 10 撫子は秋の七草の一つ。 11 「此巻、玉かつらといふ事、箒木の巻に物語せし、なてしこの事なり」(『小鏡』)。2 箒木の巻で、夕顔は娘の玉鬘を撫子に例えた和歌を詠み、夫の頭中将に送った。 「撫子」に「撫でし子」(撫でるようにかわいがった子)を掛ける。 12 玉鬘一行は舟に乗って、九州から脱出した。

13 「かの大夫のしやうけん<sup>(少)</sup>、をひての舟をやたてんすらんと、おちて<sup>(希)</sup>、はや舟にて上せたてまつる也。これを、「つくし上りのはや舟」といふ」(『小鏡』)。「早船」は漕ぎ手が多く、速力が早い船。14 梅は初春に花が咲き、香りが愛でられた。15 初瀬は注2を参照。玉鬘一行は都に帰ったが母の夕顔を探す当てもなく、神仏に願を立てて長谷寺の御利益を頼むため、初瀬に参詣した。16 「人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける」(古今和歌集・春歌上・四二・紀貫之)の歌は、貫之が初瀬で梅の花を見て詠んだもの。17 杉は古来、神木として崇拜された。18 当歌は右近(注2参照)が玉鬘に出会って詠んだ歌で、「初瀬川古川の辺に二本ある杉 年を経てまたも会ひ見む二本ある杉」(古今和歌集・雑体・旋頭歌・一〇〇九・よみ人知らず)を踏まえる。古川は初瀬川のこと、長谷寺の南を流れる。

(胡鴻洋)

